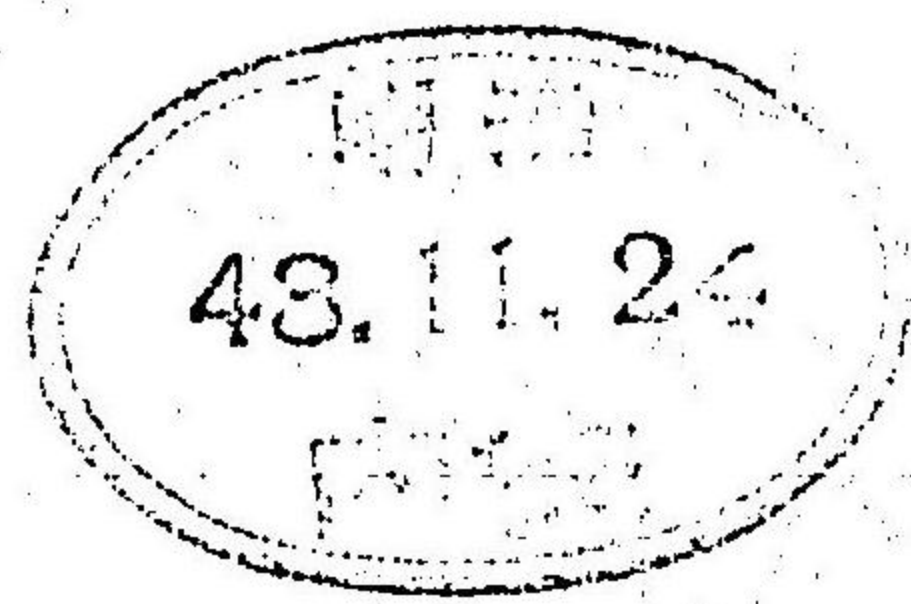


332-2



寂
し
き
曙

三木露風著

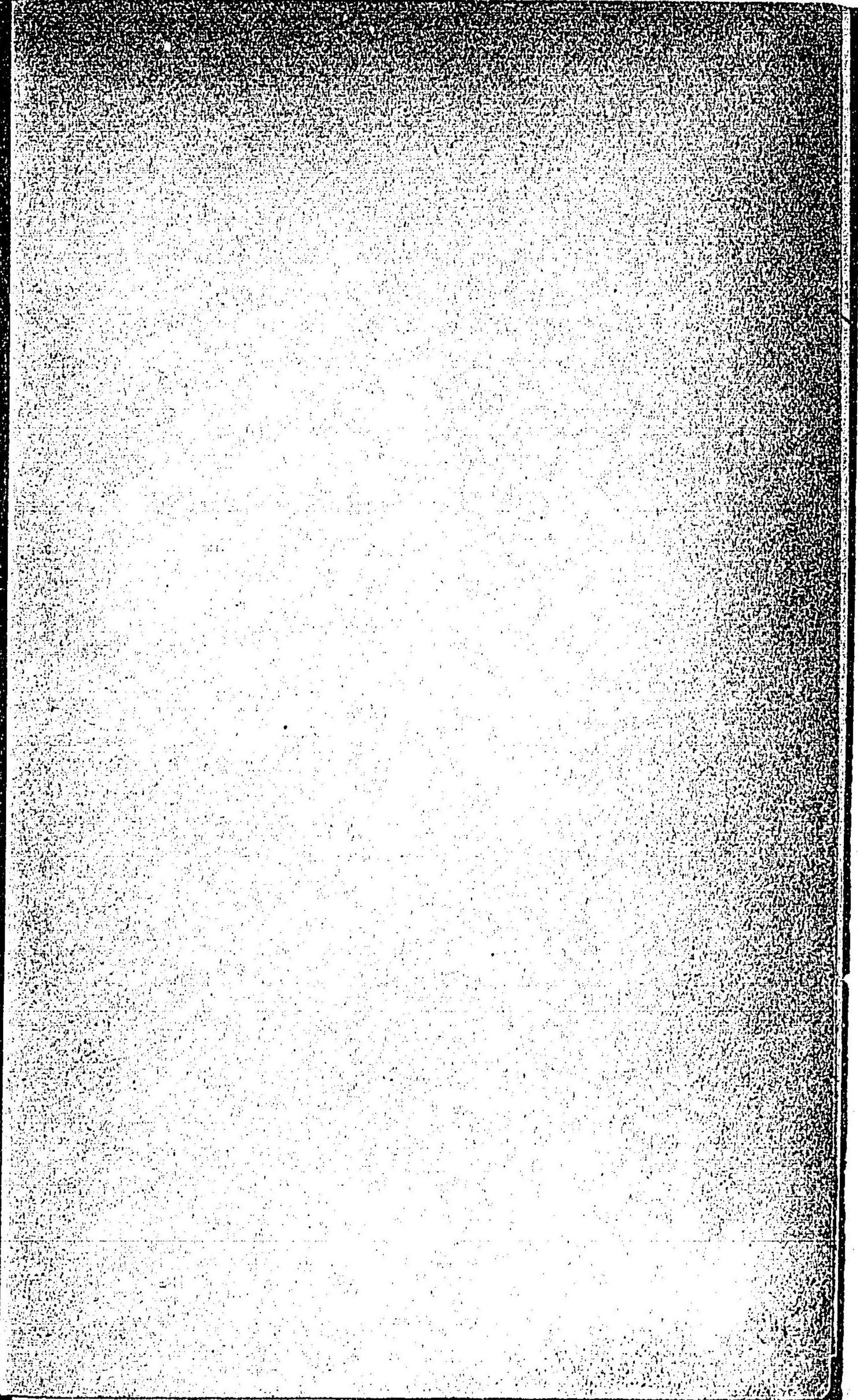


この書を永井荷風氏に献ぐ

そらうなういーら



EX·LIBRIS^{MONX.}
S
3



その面は憂愁のスフィンクス
過去よりきたる悲しみの烙印あり
靈は雪に埋れて燃え、
荒きすゝり泣きの聲、そこより聞ゆ。

(沼のほとり)

寂しき曙

永
遠
ニ
ハ
シ
テ
シ
ノ
コ
ト
ヲ
シ
メ
ル
コ
ト
ナ
リ

神と魚

つねに暗の寂寥に棲む。

太陽は海の彼方をめぐり、
夜はまたこのところを忘れ去る。

神の名を彫りてその石を埋め、
その石埋れてふたたび見す。

ああ！雪は單調なる世界を築く。

葉もなき木は、

凍れる池の上に影を映せり。

長き時を費せども、その影うごかず。

いま見よ。魚は下より浮びいづ。

魚は下より………事もなく外をうかがふ。

沼のほとり

蒼^{あを}さめたる光、音なく

あけぼのは雪の上に来たる。

風は幽^{かす}かに枝をふるはし

木は屍^{しかばね}の如く、空しき腕^{かひな}を交^かす。

そのとき君は沼のほとりにあり。

沼の水凍りて、

煙のごとく「夜」は靡けり。
いかなれば君のこゝにありしか、
あゝ。いかなればわが眼に、君の視ゆる。

その面は愛愁のスフィンクス、

「過去」よりきたる悲しみの烙印あり。

霊は、雪に埋れて燃え、

荒きすゝり泣きの聲、そこよりきこゆ。

木は屍の如くに充つ。

蒼白きあけぼのは今、來らんとす。
語れよ。無言の君、寂び果てし沼のほとりには。

暗き地平

あけぼのは未だ来ず、
静かにして平らかなる野よ。
風は死人の髪のごとく
枯枝のほとりに頷ふ。

刈られざる雑草の上に、
目のごとく露は結びそめ、



その上に暗き空かかりて
星はかすかに青味を帯びて動く。

彼方に地平あり、
黒き断頭臺は、されど地に隠れず。
夜は濃くその上にあつまりたれど、
音もなし。底知れぬ海のごとくに。

夜の碑銘

わが戀人は、墓に眠れり。
かくも静かなる月光の中に、
彼は聲だもせず。

されど我心の臓は、
今や音高く搏ちひびけり。
あらゆる休息と寂寞との中に

わが身は熱き呼吸をなす。

月の光は

今宵、「今」を「昔」に返さんと囁き、

樹木の肌はやはらかに、

碑銘は絹の如くにかぶやきたり。

吐く息重く、優しく、

戀のなやみは臥床の君を疲らし

夜毎々々にかさなる接吻、

月のかたへに手は白く君は眠りし……

戀人よ。その夜に似て、

あゝ我胸は、音高くなりまされり。

たゞ語れ。熱き接吻を。

長き草の葉の顫ふごとく

われはいま、「死」の欲情をさます。

呼 吸

日は暮れ、日は重なり。
かくてまた夢の如くわれはあゆむ。
投げかくる光は霧に似て果てしもなく
たゞ臆ろにして、眩惑する大氣の中を
いづこともなく我はあゆめるのみ……

あゝ、えもわかぬ喪心の歡こび

温き忘却の夢よ。

日は輝やかに沈黙し、
時はおもむろに移りゆけり。
美しき地上の断片のごとく
わが命は、
光の中に呼吸づく。

① 快樂と太陽

われは四月の臥床に横はれり。
大空の光青く、
心の上へのぞみたれば、
われはかくて痛ましき快樂の眼を閉ぢたり……
静かなる、されども物ほしげなる日の光、
あゝかの光こそは我が恐るゝものなれ。

愚にも女窓を開きてみちびき入れし、
緑の木の間の大なる赤き太陽。

そは告げよ、またも正しき生活のあゆみなるか。
心の放蕩と假借となき、
そはまた憎と勞作との人生なるか。

されど、されど、我眺めはあまりに悲し。
我庭は空しくして小鳥さへ飛ばざれば、
また流るゝ水の音も立てねば——

あゝ窓を閉ぢよ我女。

いかなれば汝の目の訝しみ我れを見まもる。

そは汝と太陽との、

そは快樂と太陽との、

今や、おそるべき闘によりて色移らんとする我
面^{おもて}を。

靈^{たましい}の蒼ざめて顔^{おもて}ふ面^{おもて}を。

くるしみの犯さんとする我面^{おもて}を。

あゝ閉ぢよ窓を……

失 望

讀みさせる「物語」を、
奪ふ者はあらず、
なほも讀め。温かき手を組み合せ
青春の惱ましげなる目付して
白日の谿底の、
汝が長き髪を吹く風を浴み、
息次ぎて、讀みゆけよ——

このもしきは、青き物語の
たちまちに汝が心を魅することなり。
酔ひたる面持の、
されど次第に蒼ざめきたる時。
「あゝ如何にして心は悲しきか」と
やゝありて汝は呟かむ

夕暮きたり………
呟きも、汝が心も失はれむ。

憐 憫

速やかに雲は遠のかんとす。
眺めよ。暗き者の移りゆくを……
かぎりなき秋の野の憂鬱は黄金の落日には
ひ、
収穫時の荷車は地平に隠る。

涙に濡れし汝の面輪！

その青ざめて静かなる、汝のほゝるみは
今やわれらに失はれし
「春」と「夏」との光より——猶も美し……

季節は過ぐ。

記憶と共に路の傍を。

あゝされど十月の陽は残んの色を染め、
彼方に微風起り
速やかに雲されて飛ぶを見れば。

忘れされ、忘れされ我が女よ
われら、過ぎ去りしあとの静安に、
いともいとも、蕭やかなの言葉もて接吻すへまじ。

消えゆく晝

暗き空のもと、
森の梢はうちそよげり。
そは杳か遠方にひそみたれど
わが哀しみの眼は、
木の葉の動く一つ一つさへ見定むべし。

山の麓の貧しき村。

黝くろき野は彼方あつちにうづくまり
池いけはまたひろびろと水を湛たへたり。
そはすべて消えゆく灰色の晝ひるにも似て
煙けむりの如き風、中空ちゆうくうを擾たす。

あゝ静しずなる、されども心騒さわしき夜よ。
われ獨ひとりり遠方あつちを悲かなしむ、
哀あはれにおぼろなる方かたを。
暗くろき暗くろき森もりの梢しやうを。

凍えてひよく芭蕉

凍こへてひよく芭蕉はせきは、
わが庭にわに枯かれたる色いろを見せ、
冬ふゆは、その聲こゑの中なかにあり。

忘わすられしすべての希望きぼう、
悲かなしみに滅なひゆきし我が心こゝろは、
やすらかにいま眠ねりうべし。

あゝ、われによるこびあり、
すべてのものは失はれて、
再びわれによるこひあり。
朝あしたに嘆なげく小鳥。
その巢をいで、汝いましの見ゆる時、
われもまた歌ひいでむ。飾りなき生活せいかつよと。

黄 昏

われは太陽たいやうの青ざめたるを見、
われは残る光の谿間たにまに落つるを見たり。
いくたびか色かふる黄昏たふごはきたり、
半圓はんえんの空は遠くのがれんとす。
旅ゆく人よ。

あゝかく静かなる死と沈黙との前に、
こゝろ悲しく君は希望を失ひしか。

われは太陽の青ざめたるを見。

われは、残る光の隙間に落つるを見たり……。

冬の詩の中より

雨は銀行の窓にしたより。

雨は荷馬車の旗にもふる。

雨は十字路の敷石に落ちて

雨は凹みに眼の如く光りたよふ。

あゝ、色青き夕暮の光

くづれゆく寒き地上の雨よ、

冬きたらんとして我心は、
暗き安息を待つ。



小 逕

あはれなる戀も失はれむ
あはれなるは廂の上、
青き葉の滞れてかゞやくなり。
惱ましき君の小逕は如何にせし
こゝろ空しくあこがれし我が夏よ
戀の小逕は如何にせし。

語れ。語れ。

葉蔭の白き微笑は風にまぎれて
青き汝の心より逃げ去るを。

されどもし

されど若し彼の女死したらば、
わが心悲しみにとざされぬべし。
すべてのもの我より離れ去るとき
その過去ゆるに君は悲し。

木の梢に死する小鳥のごとく、
再び聞かざるその聲のごとく、

あゝ、いかに戀しかるべき女よ。

廂

午後の空はかゞやき、
秋は光の中にあり。

廂ひましにふるゝ木の枝に、
葉は青く、
ゆくりなき涙をさそふ。

あゝ君はわがまへに
すはりなれたるところに座し、
こともなきほゝるみをもて
われを見まもりたまふか。

聲にも立てず、我心は忍び泣けり。
故もなく悲しみもなく、
わが心は忍び泣けり……………

別るゝ君の眼

別るゝ君が眼のかゝやきは、
衰ふる夕の空の彼方、

消えゆく光の斷末魔にも似たり……………。

ふたたび我は見ることなし、
あゝふたゝひ、われはそを聴くことなし。
かく衰へゆく黄金の色の美しさを。

秋はそこより……

ほの白き光をみだす露臺の雨、
暗きあかつきに煙り、
屋根は滯れて、涼しき夜明を待つ。

あゝ、暑くしてちからなき
今はわれらの床を出で、
終を告ぐる君が夏を嘆き、

束の間なりし歡喜の日を思ひいでよ。

おとづれきたる露臺の雨は、
われらの心を破り、
涙に濡るゝ暗き臥床に落ちて、
秋はそこより、いつしかに面かどやく。

眠の歌

われをして、甘き眠におちいらしめよ。
やはらかなる夜の草木のごとく、
地に落つる月光の影のごとく、
惱める額を静かに、
かくて死の如くも眠らしめよ。

秋のをはり

小猫の脊はやはらかに、
秋の日をうけてかゝやき、
物の影はあざやかに、地は微温して楽し。

ひとり小窓を閉ぢ、
あゝ、いかなれば汝は語らさるか、
汝の悲める額、曇れる眼よ。

青空の光美しく、
樹木はこころよき秋を示し、
色黄なる小鳥は草叢に、死なんとするをよろこぶ。

見よ、すべてのものの温き終を告げ、
すべてのものがやけるを。

ああ、いかなれば口噤み汝の語りいでざる

色悲しきをんなよ、
野は楽しき秋の滅に充ち、
秋の滅は、今は早われらを待つ！

冬

青白き空の色わづかに残り、
折れて落つる木の枝は絶望せり。
森の外にひびく黄昏の鐘、
黙してあゆめる鳥と人と……

鳥は、落葉に埋れし道にくんだり
人はゆくところを定めざる、旅をするにも似た

り。

絶望と嘆息とは空を翳し、
冬は共謀人のごとくかれらに來る。
ああ、いかに佗しく汝は望を失ひしか、
地上に吸はるる鳥と人と、
長くして凍ゆる旅。

心

汝の危き心を愛し、
いと醜き古き家を忘れよ。
ひとり絶望の涙をもて眞實を語り、
祈を思はざるはなほまことに絶望せず。

ああ青さめて泣く苦痛と経験とよ、
なほいまだ汝は絶望せず。

思想は絶望せず。

不
信

神もありや我こころに。
よろめける我こころに。
衣をぬぎて身を投げ伏し
われは眠の眼を閉づ。

いつしかに我眼より涙流れいでたり

神よ。祈りを知らざる者は不信の者は
ああ塵のごとくにして汝を求む。
われは求む。罪と恐怖と腐懲とを
ああ神よ。塵のごとくにして我は求む
罪と恐怖と腐懲とを——

ひとりの路

孤獨な思想を愛する者。
夜の枝に、黒い梟が啼き。
わびしい冬の畑を土龍が潜む。
すべて暗い孤獨を愛する者。

△ 經 驗

愛といふその愛を、
好き色をもてなぞらへよ。
知らざる色のみわれは見る、
暗きこと、知らざる色のみわれは見る。

翼

色青き空は、なつかしくして捉へかねたり
煙を吐かざる赤き煙突の彼方に
小鳥はVの字の如くに飛ぶ。

たゞ飛ばんとするがゆゑに、
小鳥はその翼を持てるがゆゑに飛ぶ、
地平に影の消え去るまで。

日 没

目に見えざる宮殿をのぼりゆく、
その人々の群の中にも、
われは悲しき、我影を見たり……

ああ、我が踏むところをして消え去らしめよ、
痛く鋭き聲をあげて、
踏む土の手はわれを捉へむとす。

人々の聲は心失せ、霧の中より聞ゆ。
人々の聲は、黄昏の日没を超え
われもまた目に見えざる宮殿を叫ぶ。

屋根の上

青ざめ、物思ふ「夕」の額。
固く結ばれゆく唇には
無言の微笑のみ、懐かし……

空の彼方は、黄金の色の落日を染め、
軟かき夜のころもの薄きぬは
やや暗き色にかゞやく。

屋根の上に散る落葉
憂愁の都會の中の風に吹かれ、
屋根の上に散る落葉は、
暗き我思とともに、凋れて飛ぶ。

音 樂

すべてのもの見えがたく
臃^{かた}の象^{かたち}は薄^{うす}帛^{ぬい}を引よせつつも隠れたれば
ただ悲しみを吹いづる夜^よの音楽……
ちからなくそは森の上^みにためいきし
青白き句の奥^{おく}にたよへり。

夜の沼はうるはしく

あやしげに猫の死骸もかゝれば
黒と銀との陰影に
身を顔はする夜の鳥は
またも静かに想ひたゞすむ。

庭の窪地

ものうく單調なる秋の夜に、
雨ふる庭の落葉はひるがへり消ゆ。
風は池のほとりより、
見えざる空に遠のき、
暗くおぼろなる家の方よりして、
鐵琴の音は好き唄を織りいでたり。

窪地にながるゝ長き風のうめき、
さややく雨と木の葉と、
また折々は暗き汽笛の長鳴も、静かなる夜につ
つまれ、
庭の窪地にあつまり来る。

ああ、やはらかなる温かき窪地の暗さ、
捉へかたき音楽の空気が、
鐵琴の音はあか／＼とその中より走りうまれ、

小兒のごとく懐しく、幼く、
我心をいざなひゆく——庭の窪地にまで。

寒き「のぞみ」

草の上に横はれる
悲しき牛の一群、
その背はひとしく日の下に照らされたり。
暗き秋の野には斑らなる光ながれ、
そこそこに蹂にぢられし枯草の根は、
落ちて水だまりに、

土碗と共に沈みゆけり。

眇目の牧人は出でて角を吹けど、
なほ黄昏は来らず。

日は沈まず……………。

わが心は群を離るる一つの牛よりして
故知らず誘はれ泣く——

眠りのまへの詩

われにきたれ、眠の嘆息、眠の *ANDANTE* よ。
風は静かに戸の外にひそみ、
落葉にまぎるる秋の鐘は、
遠くより夢をさそふ。

今宵わが寐床は裝飾もなし、
夢は白き沈黙をもて優しくあまやかさる。

おと、深夜薔薇の如くかがやく圓笠の洋燈よ、
戀人の臨終の床のおとづれば、
その明るさよりも哀しからずや。

昔の戀は我が心を鳩の如くにふくらましめ、
昔の戀のやはらかきは杏の花の散るに似たり。

われにきたれ、眠の嘆息、眠の *ANDANTE* よ。
風は静かに戸の外にひそみ、
落葉にまぎるる秋の鐘は、遠くより夢をさそふ。

秋の夜の小鳥

川の上になびく霧は、
月の光の中に
煙のごとく消える。

ああ！さまよふ者の胸に顔ふ
低い夜の囁ささづり……………
神秘と空想との中に

暗と光との中に
わびしくなげく小鳥よ。

の十月

すべてのもの我より離れ去る時、
われはすべてを愛し
すべてのものを抱く。

秋は五月の花よりも美しく、
秋は白きこと、君か腕よりも、
哀しきこと、接吻よりもまされり、

ああ、來らむとする、ものうくして長き夜。
廢れし庭の木の間のささやく秋。
「昔の」秋。

返らぬ日あるがゆるぎに樂し、
返らぬ日あるがゆるぎにわれは愛す。
ああ返らぬ昔となれるがゆえに、
うるはしき秋のわが女よ。……

雨の戀

ぬかるみに落つる雨のひびき、
そが中に明るき燈火は濡れ
家は煙れる光と色とを投ぐ。

彼の女はおぼろなる方に坐り、
彼の女は黒き外套をまとへり。
街の辻角にとゞまれる乗合馬車より

彼の女は、
堪へがたき一瞬の媚をおくる。

青春

戀人の群にまぢれる
君こそはいと蒼き惱の花なれ
過ぎ去りし青春は再び戻り來り
夜の泉を飲む旅人のごとく
わが心は、夕にあゆむ。

されど君よ。青春の朝はわれらを訪はず。
われらに來れるものは憂愁の黄昏のみ……。
あゝ、如何に哀しく君は蹙音をきいたりしか。
耳をすまして君は、暗き薔薇の如く、
近まさりくるその蹙音を。

残れる記憶の色

蝗はおとろへて翼を鳴らし、
忘れし草叢に日はかどやく。

無惨なる「青」は、

今や、過ぎ去らんとする時を示せり……

あゝ、小鳥が梢の嘆。

甘くやはらかに……
そこに聞ゆる、懐い「夏」と「むかし」。

夜の追懐

斜にかざす夜の枝は、
暗き憂愁の世界に、
されど涼しき追懐に顔へゐる……

薔薇色に輝く月、
そは次第に前方の影を濃くし、
聲なき小鳥の柔かき翼に染む。

あゝ、心よ何處にひそむ。
昔ありし、樂しかりし、心よ何處にひそむ。
我夜は見よ、静にも優しかりけり。

月と風

つねにそは目指すところなし……
悪しき風に、
病める風に、
我が心はたゞよひゆく。

都會の屋根に月出で、
憂はしく、涙は落つ……

青ざめよ、
消え失せよ、
かくも獨り、うれひある身は。



涙

いかなれば此くも傷つきし
いかなれば我心破れゆきし？
誰か知る。我涙は謂れなく落つるを
誰か知る。誰か知る。



幻の墓

悲しみの庭夜となれば
幽かなるした草の葉もかゞやきて
そこはかとなき明るさに
顔へる銀の月。臙に黒き緑の上に湧きのぼり、
絡み合ふ小枝の影は洞穴を隈どりたり。

おち怖れ、小鳥も今はひそみつゝ

落ち静まりし空しさに聲もなし。
耳かたむけよ。あゝされど
あはれなるわが内心はさゝやけり。

あはれなる我さゝやきは夜の樹の膚擦れあひ
て打つ響、
なほそれよりも傷ましく――

いま幻に見るは彼の、
青草の根にまつはりて流るゝ泉なり。

冷めたき霧にまぎれて、うつらふ光の奥、
かゝやく墓をわれは視し………

音なき風のうするゝごと
今宵しづかに猫の歩みは脱けいでて

影匂ひのぼる墓の上。
終夜わが悲しみはまどろまず。
終夜わが悲しみは夢みたり。

あゝまことに微風の、

泉の上にひびける夜。
顔へる銀のしたよりて消えゆく夜。
次第に青ざめし夜………

○ 夢

藍色の花を摘みし子よ。
そのゆめは散りてゆくなり
汝が~~は~~は、
ほのかなる夜の間。汝が眠の間に——

九月の色と響

青草は濡れてかゞやけり。

青き翼の鳥は、

小供らしき寢床より羽ばたきして
空地へ来る。

森の中よりつたはりて

翁が吹きいづる笛の響

黄金色なり。

あゝ九月。谿を行けば

静かなる青緑胸ふくらみて、

そこはかとなく歎きあひ、

音なく白日の風の寄りくれば、

ものうきものに揺すらるゝ。

九月。九月。

わが想は夢みたり……

あゝ甘く消えゆく夏の光により、

優しき秋のかどやく響の中。

汝の戀

やはらかな毛並の小猫は病氣した……

あゝそして冷めたい汝の手は蒼白く、

愛すべき指環が、

深い緑に顔へてゐる。

雪が歌んだ……

窓の外。

ガラスのやうな薄い雲が通る。

深い深い夜。

また汝おまへは同じ手付をして髪油かみあぶらを塗る。
死人の皮膚を嗅かぐやうな髪油を……

風が静まるやうだ。

暖爐だんろをあたくめよ……
汝おまへの瞳まなこの中で、

性慾が苦痛を表はしてゐる。

の鐘

鐘は重たし
鐘は重たし
ものみなを忘れよと、
されどまた温かく
来しかたも、おぼろおぼろに消えてゆく
あれはあれ、あの鐘は京都相國寺、

の揺るゝ小舟

残れるたそがれの光やはらかに
暗みゆく並木の影のうつとりと、
おほろに高き時計臺も、一隅に暮れ匂へば
橋の下なる我河は
はやそことなき歡喜の聲を立てたり。
われらが涼しき戀。

音なき小舟のすべりゆく水の上
静なる櫂の歌、心の空に舞のぼり
二人の言葉こゝろよき空しさに
そは廢れつゝ繋がれて遠くに迷ふ……
あゝされば、われは緑にかゝやく夜
榴ましき君が句を知れるのみ。
かくもたゞ、短き呼吸の君が句を知れるのみ。
いと明き夏の夜の小舟の上。

夏

夏きたらむとする低き野に
樹は觸れあひて息あたゝかく
いづこにか鳥啼けども夢のごとさだかならず。
烟れる不透明の太陽は、
今や疲れたる黄金と緑との午後を示し
心内にすすみくる平穩の光を投ぐ。

森の入口に朝またきより
はたらきの家族の者、うち捨てゆきし
荷車は静に黒き影を横たへ
そのあたり乾ける路傍の草熱く匂へば、
時はすべての上に聲をひそめ
かゞやく静寂に少時休らひたり。

午後。

我が見るかゝる束の間の心に
さらに今、近きところを來るものあり。

つひにつひに、そは、我に微笑むごとく
正しくもあらはれくる堤の上
WORKERの濃き陰影の帽子。

又 過ぎし日の窓邊

青き葉は伸び茂りて、
過ぎし日の窓邊を窺く。

重き窓掛に日光はかがやき、
よび立つる鶯鳥のこゑ、家の裏手より、
木の間の前方より聞えくる。

そはいつの日なりしか。君と我と
鏡の前に紅き薔薇を凝視めてあり。
すべての好きものよりなほすぐれて好き愛を、
われらそを、心に夢み居たり。

いま、好き愛は逃れ去る。
紅き薔薇のほとりより。

鶯鳥のさけび、
ただ聞くは水のひびき……
すべてみな重き晩夏のこゝろに。



戀の椅子

夜の女の静かなるは、
ピンをもてとどめたりし
やさしく靡ろの畫にも似たり。

汝の膚は、木炭畫の、消えゆくあとの愁を帯び、
たゞふさはしく黄金の縁を描くに似たる音楽
あり。

あゝ戀の夜の二つの椅子。
卓上に注ぐ水よりも、
なほ美しき汝の味、淡き淡き味。

あゝ眠りをさます夜半

眠りをさます夜半、
ゆるく唄ふ楽しさあり、
とけゆく心の柔らかなる
ゆるく唄ふ楽しさあり。

あゝ睡眠の鍾は深く、投げあぐるにちからもなし。

おぼろなる君が腕かひなの美しさよ
黄金おうごんと白との不思議なる君が夢は、
わが胸の上に、
胸の上に歌曲うたを織る。

小 曲

青春の小徑せいのみち惱なやましく、
足取りはうらがなしく、
されどまたおもしろし。

憂愁うれしこそはやがて其の限りも知らぬ足拍子あしびし。
足拍子あしびしとるそのひまより、
「人生」は過ぎ行かむ。

或ときは、ほの暗く優しき影によりそひて、
さればまた白日といへども猶。
臆ろにうかぶ想をば辿らせよ。

幸みちしおくつきの

そは我おくつきの、

青き小鳥のそが上につぶやく時。

ああ彼の太陽は、

此日も出で、静やかに燃えそむべし……

胸

雨ふる庭の哀しさ、

消えゆく胸の哀しさ、

たゞ憂ひのみ……のこる哀しさ。

ふたりの夜

夜は重ねゆく浪のうねりの如く
音なく光なく、滑らかに夢む。

静かに遠く更けゆくほど、

われらが戀はかゞやさいづ。

ふたりの言葉、かつ絶え、かつ續き

やゝありて溜息のみ、にほやかに胸にのれば、

あゝ夜は間近にたのしき臥床をつくり、
味よき戀の盃をも、
歌の濤間に泛はせくる……………。

大波
慾望

われは欲りす
好もしき女を
ゆるく疲れて快よき女を。

われは欲りす
痺れし歌を
美しくして痺れし歌を。

われは欲りす
舌によき彼のもろくの肉と野菜
白きクロスに舞踏する官能の美味を。

われは欲りす
酒と煙草と、
瞬時にして溺るゝ酒と煙草と。

われは欲りす

香水のふりそよがれし眠の床
ものうく魅する夢の刹那を。

……われに堪えかたき欲望あり。

われは、かく生き

われはかく願へるのみ――

そはわが全身の呼吸にして

美なる一瞬の命なるを。

心の奥

1

夢は青く、静かにして

月の光の中にたよよふ。

見たまひしや、わが心の奥を、

古き昔の繪織物、

おぼろに消ゆる美しさを。

憂愁の庭に、
花はみな咲きて散り布き
小鳥は、空に飛ばむとして夢む。

あゝ
見たまひしや、君はまた
ロマオの若き語らひを、
朧なる織物の、かき消ゆる心の奥を。

悲哀に隠るゝ
白き額、
嘆息に燃ゆる胸、
さし伸べたる戀の手は、甘くしてやはらかなり。

音なき園にかゝやく夜……
かゝやく夜。
人と花と、見たまひしや
あゝ、かく、美しく静かなるを。

II

月は舞踏に疲れ、
 花やかにして懶うき床に眠る。
 今宵、地上には戀の柩をつくり
 あまたの花を飾り、
 ひそくと従ひゆく人の群あり。

月の前を過きり
 憂愁の園を出で、
 音なく従ひゆく人の群あり……

III

おぼろに曇る夜はなつかし、
 戀の室はたのし、
 君がねむりは花の如く
 白き腕は浮きて見ゆ。

かの窓より、
 光は忍び入り、
 美しき淫行の夢は断續して



ふたりの身を疲らす。

あゝわれらが柩はこゝにありしよ、
われらが戀を守るべく。ふたりの床に――

IV

春。

紅あかき小鳥はかくれ去り、
わが憂愁の庭に
朝も、夜も、空あざしき風は濫なるむ。

紅あかき小鳥はかくれ去り、
巢はいつしかに毀これたれたり……

おぼろに消ゆるふたりの夢、
古きくわれらが戀物こひもの語かたり

生 物

太陽は、
南の水のほとりより、
森と野とにかゞやきたり。

その野は燃えて、こころよき香をみなぎらし、
森は微風かぜにゆすられ夢む。

いろくゝの生物せいぶつこゝに接めり、
見よ、飛べるあり爬はふものあり、或者は眠れるを。
光の中に咽ぶを……

あゝ輝く自然よ！
かれらの集りのこゝに來きる前まえ
蛇は早く、市の下水溝かみどよりのがれ、
鳥はおそるべき煙突の巢を捨てたり。

遠き市しより、村落より、

かれらの跳りきたる日、
新しき棲家は自由の中に生れ、
よき縁をもてかざられたり。

あゝ知れりや、

彼等が記憶すべき日を。

如何にその賑ひの歡ばしかりしかを！

日かげの停車場

わが古き停車場は、

都會の中に埋もれし空洞に似たり。

かがやく日の光、朝に出で、

煙れる市の輪廓を彩どれども、

その光りは停車場の入口よりして引き返へせ
り。

わが古き停車場は、また赤き崖をめぐり
ああいきたびか汽車は日に叫びをなす。
赤子にむかひて笑ふ獸のごとく
そはまづ煙をあげ、窃み足してすすみきたる。

晴天の日に女客、扉を出で
袈裟をかかげて階段をのぼりゆけば、
またつめたく顛ふ階段を、
彼の女のうしろより、匍ひのぼる影あり……

されど凄惨にして美しき女客。
彼の女の消え去る前、
停車場の時計は死して動かざりき。

ああわが古き停車場は
黄金の碎片と毒煙の中に呻き
たえず痙攣し、
目は眇して『過去』をのみ凝視む。

わが古き日かげの停車場は、

かくて今驛鈴を鳴らし初めたり。
かくて今、何事か報せんとす。
何事をか報せんとす。

午後の都會

午後。
狂ほしき情緒の中に、
人は半鐘を立てたり。
あゝいま、
新しき火見櫓に、
かきけぶる都會の脊を眺め、
何者か、黒き恐怖の叫びをなす。

青ざめたる叫びを。
死せむとするものゝ叫びを。
半鐘を立つる日……………。

顔の憂鬱

汝があゆみこそ悲しけれ、
眞珠色せる五月の雲のあひだより、
斑らにかがやく日光の
傷ましくも、半面を隠したれば
そは彼の、うるはしき群集の中の、ひとり子のご
とく、
およそ又世界の忌むべき名によれる如く、

愛もまたのろはる。

思を語れかし——かく汝が抱きたる

險阻と黒の憂鬱とよ。

されど譬へは、蒼空の下。燐の水に沈み去り、

熟せずして果物の落つるを眺め、

心平らかに、なほよそごとと見過さば

汝はまた道知る者のたぐひにか眞の勇者かと、

我はおそる——

汝が顔の憂鬱こそは悲しけれ
すべてすべて汝が歩みこそ悲しけれ。

我か憂愁

われは怡しき世を眠れり。
すべての歡喜と、かゞやく愛とをあたへらるゝ
も、

わが悲しみの眼は開くことなし。

母胎を出づる時、

すでにわれは憂愁とよみに生れ、

われは憂愁とよみに生きたり。

「何故に人のかく悲しき」

われはかく誨へられたり、

また、自らを疑ふことに狎れたり。

いかなれは君はそを空しと説き、

偽としも斥ぞけ得む。

不可思議なる運命は、

我身に根ざして蔓こり、

くるしみは靈を犯し、
日夜、謎の如くにつきままとふ暗き影あり。
解きがたき沈黙あり。

われは我が指をもて、
脊髄の節を知りその音を聞き、
かくて自らの「生存」を知れり。
されどそれは眞の喜びなりや、
されどそれは何物をか證したりや。

ものうき、ものうき命の悲しみ—
我が知るはたゞこの憂愁のみ。
あゝいづこを歩むとして
堪えがたき寂寥と憂愁ならざる。

見たまひしか。君は彼の帆船のゆくへを、
青き帆船のゆくへを。
風なければその旗はひるがへらず。
死没の運命を荷ひてすべりゆく……

永き航海はかれらを疲らし、
かれらの希望はたちまちに失はれむ。
かれらの前に戦慄あり。
かれらを呑まんとするの死あり。
朝に氣負ひて、われもまた。
彼方の岸を求めて漕ぎ。
かれらの如く疲れ、
たちまちにして戻りきたれり。

何物をも我は得ることなし。
あゝ大なる者は冥想し、
固く閉ぢたる唇よりは、
いさゝかの言葉をも出さず、
われは貧しく哀れなる中に生きたり。

大なる者よ、
あまりに静かに、あまりに冷やかなる支配者よ。
いかなれば解き得ぬ心にして、
いかなれば我等は與へられたる！

懊^{あや}める者にも、戀は緑の樹蔭^{こかげ}をつくり、
しばしのほどの歡^{よろこ}ひをあたへんとす。
されば或ときはわれ、旅人^{たび}の
泉に傷を洗ふごとく走り求めき。

あゝされどまた戀に何の力^{ちから}ありや

氣の失^うせたる莓酒^{いちじゆ}のごとく、

そは悲^{あは}しき味^{あじ}なるを。

われはかくして生けるのみ
われはかくして「生存」を知れるのみ。

われは怡^{たの}しき夜を眠れり、
たとへ、すべての歡喜^{よろこび}と、かゞやく愛とを與へら
るゝも、

我が悲しみの眼は開くことなし……………



沼河比賣のうた

一

いとし殿ごに。何で袖ないふりをする。
心にもないふりをする。
ほんにほんにと思へども。
青草のなよくと。なよくと。わしの心はまよ
まらぬ。

まとまらぬ妾の心は浦州鳥群れ騒ぐほど騒ぐ
ほど。

でもまあ初めて逢ふことが。

わしや何とせうはづかしい。

わしが心は水の邊の今は啼き立つ鳥である。

あとは寢鳥の静まれば静まれば。

あれほんとうに待たれど來ぬといふて戸の
外に戀死などはせまいもの。

ほんにねえ。

二

暮るゝとて。暮るゝとて。

あれ見やしやんせ。くるくると大山の端に落ち
てゆく日わいな。

ぬばたまの。ほんに床しい夜となり。

もしもさうまでわしが殿ご。お待ちやるならそ
の時は。

そつと忍んで。戸を開けて。

わしや行かうもの。お前まで。

ほんに優しい殿わいな。わしが眞白のたぶむきに。

淡雪のあはくと若やぐ胸をそ叩いて。

抱き寄りして股長に。

寝ねませうぞえ。何とまあ。よろしいこと。

待つたれど待つたれど。來ぬといふて戸の外に。

戀死などはせまいもの。

ほんにねえ。

の青くさ

落窪の野の青草は
風に吹かれて侘びしかり、
風に吹かれて消えもせず、
消えもせず、残るわが戀――

寂しき曙畢

146.
43.

目次

神と魚	一
沼のほとり	三
暗き地平	七
夜の碎銘	九
呼　　吸	二二
快樂と太陽	二四
失　　望	二八
憐　　憫	二〇
消えゆく霞	二三
凍えてひどく芭蕉	二五

黄　　昏	二七
冬の詩の中より	二九
小　　逕	三一
されどもし	三三
廂	三五
別るゝ君の眼	三七
秋はそこより	三八
眠	四〇
秋のをほり	四一
冬	四四
心	四六
不　　信	四八

ひさりの路	五〇
經　　験	五一
翼	五二
日　　没	五三
屋根の上	五五
音　　樂	五七
庭の窪地	五九
楽き「のぞみ」	六二
眠のまへの詩	六四
秋の夜の小鳥	六六
十　　月	六八
雨　　の　　戀	七〇

寄 春……………七二、
 残れる記憶の色……………七四、
 夜の追憶……………七六、
 月と風……………七八、
 涙……………八〇、
 幻の墓……………八一、
 夢……………八五、
 九月の色と響……………八六、
 汝の戀……………八九、
 鐘……………九二、
 揺るゝ小舟……………九三、
 夏……………九五、

過ぎし日の窓邊……………九五、
 戀の椅子……………一〇一、
 眠なき夜半……………一〇三、
 小 曲……………一〇五、
 胸……………一〇七、
 ふたりの夜……………一〇八、
 愁 望……………一一〇、
 心の奥……………一一三、
 生 物……………一二〇、
 日かけの停車場……………一二三、
 午後の部會……………一二七、
 顔の憂鬱……………一二九、

我が憂愁……………一三二
沼河比露のうた……………一四一
青く……………一四六

装 禎……………川路 誠氏
EX. LIBRIS……………川路 誠氏

園 廢

著 風 露 木 三
 曲 巖 玉 松 小 裝 郎 太 光 村 高

——(再版發賣)——

詩壇の新氣運を促したる詩
 集なり。 著者が若き生
 涯を歌へる詩百二十余篇を
 集む。

四六版三百五十頁美裝

定價七十錢 送料六錢

堂 報 博 田 神 京 東

明治四十三年十一月十二日印刷
 明治四十三年十一月十六日發行



正價金六拾錢

著者 三 木 露 風
 發行所 瀨 木 博 尙
 印刷者 吉 岡 省 吾
 印刷所 秀 光 舎
東京神田區三河町一丁目十九番地
東京神田區中區中區中區中區中區

發 行 所 博 報 堂

東京神田區三河町一丁目十九番地
 振替口座東京三八一五番

文壇無駄話

著 江 秋 田 徳

(既刊)

印象的批評の名を以て著者の名は文壇に顯著である。此書は諷刺趣味の上に面白く且學ぶところか尠くない。批評の枯淡無趣味をかこつものは此書によつて渴を醫するであらうと思ふ。

菊半截紙數三百六十頁
定價 六十錢 郵税 四錢

堂報博 田神

人 伶

著 園 薰 子 金

(既刊)

清明の歌風を以て立つ薰園氏の苦心の書である。月夜に蘆のさゝやく如き哀愁と歡びに顛ふ笛聲の情趣を添ふ。此書白菊會同人の作を加へ諸君の机上に進む

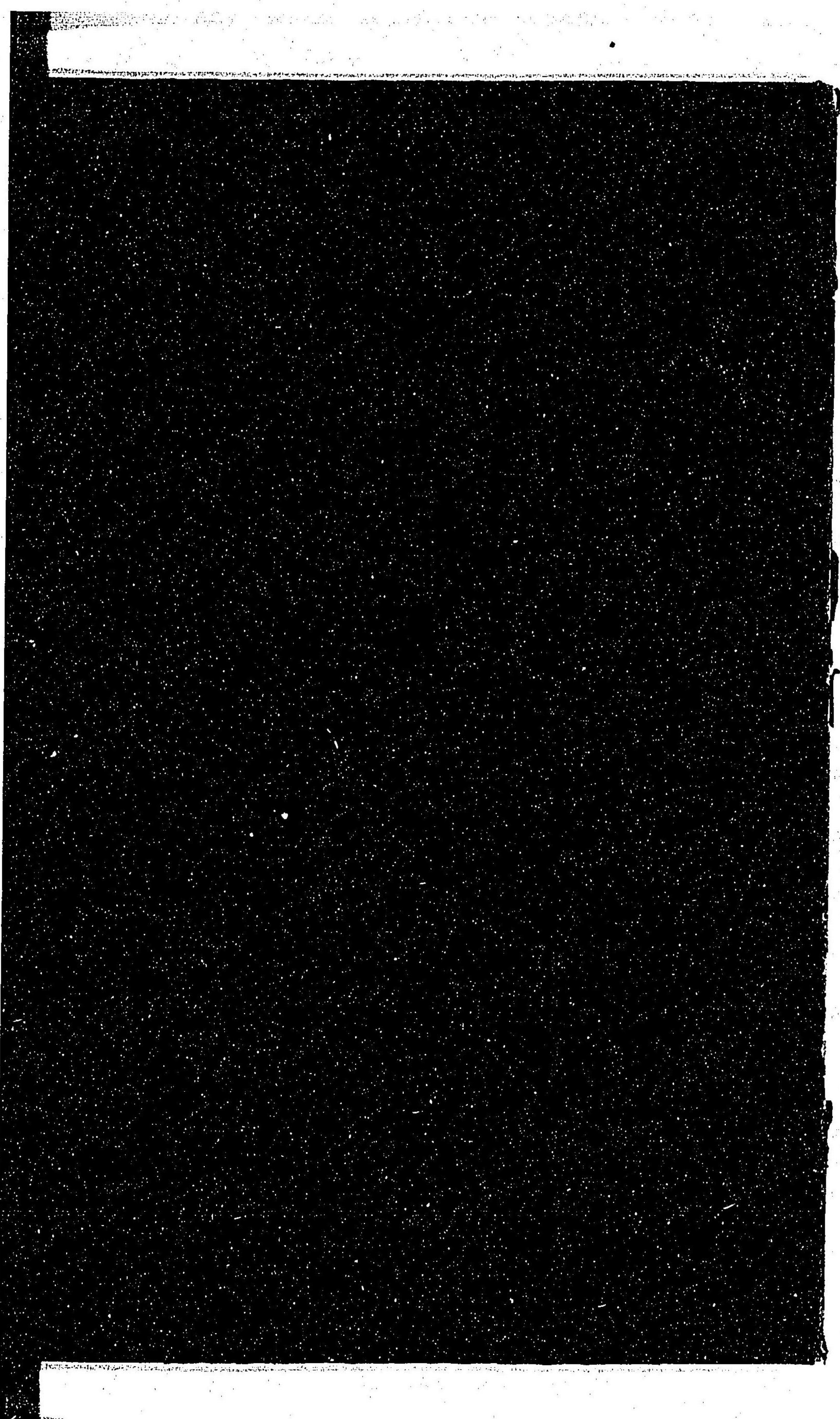
クロス上製 美本
定價 四十五錢 送料 六錢

堂報博 田神京東

三木露風著
椿の島

近刊

372
2



087962-000-3

332-2

寂しき曙

三木 露風/著

M43

DBG-0052



